

村山籌子の評伝の試みをめぐって

——聞き書きのこと（続）の3——

山 崎 怜

今回も評伝の身代りとして聞き書きの続の3を公表する。以下のように5編（4名分、おひとりは2回）から成る。それと同時に、聞き書きのほかに、2つの資料を掲載したい。1つ目は籌子の親友、松井志づ子葬送の際の追悼の辞であり、松井とはどういう人物だったか明晰にのべられたもの、2つ目は籌子の長男、村山亜土による母の姿容をまとめた1文（これはMOE誌、白水社刊の籌子特集号に求められて執筆したが、ほぼ半分が削除されてしまった）の全文である。亜土は山崎にこれを預けて点検を請いつつ、この世を去られたので、全文を元のまま、ここに印刻したい。「遺言」と題されてはいるが、これはもちろん遺言ではなく、母の息子に向けた籌子の姿を息子のほうがそれを遺言として受けとったのであろう。私はいっさい手を（一字たりとも）加えていない。いずれも評伝身代り十分な資料である。

村山籌子

——続 ナップ時代の友人による（5）——

話し手 山田清三郎

（ご自宅にて）

（前言）

山田清三郎氏にお会いして籌子のことを直接に語っていただくことを願ったのは、ひとつには『少年戦旗』の発行責任者であり、その『少年戦旗』の編集長に籌子が就いたこと、また籌子が唯一の、いわゆるプロレタリア童話（「こほろぎの死」）をそこに発表したことがあること、ふたつには山田の著作に籌子に触れた言及があり、それについて私へのお手紙にすでに記されたことがあるのだが、直接にそのことを語っていただくためであった。1977年12月21日の午後、私は招じいれられて、書齋兼応接間に伺ったのである。広くはないけれども、片面に本がぎっしり書架にあり、この書架はL字型に部屋を包むほか、奥にも高い本棚がみえる。落ちついた部屋であり、この中に小さなロッキング・チェアに座ることをすすめられた。そして、ごあいさつもそこそこに、氏の著書、新書版『プロレタリア文学風土記——文学運動の人と思い出——』（1954年12月15日刊、青木書店）をみせてくださり、籌子に触れたページを示された。

ここで山田氏をいくらか紹介したい。1896年（明治29年）6月13日、京都に生まれ、小学校のみで社会生活（労働）にはいる。

1922年に『新興文学』の創刊に参加、その後『種蒔く人』、『文芸戦線』、日本プロレタリア芸術連盟（26年）、労農芸術家連盟（27年）、前衛芸術家同盟（27年）を経て日本プロレタリア作家同盟（29年）という道を歩んだし、作家としても『幽霊記者』（26年）、『五月祭前後』（29年）を発表し、評論家として『日本

プロレタリア文芸運動史』(30年)、『日本プロレタリア文芸理論の発展』(31年)も発表、若くして華々しい活躍をした人であった。しかし例に洩れず、31年治安維持法違反により検挙、34年上告棄却によって下獄、獄中で『転向』、38年2月に仮出所、満州(現在の中国東北地方)に渡る。41年に満州文芸家協会を設立、その委員長となった。また大東亜文学者大会で活躍した。敗戦後、ソ連に抑留され、その収容所で再転向、その地で民主化運動を指導、50年に帰国し、党に再入党、『転向記』3部作(理論社、57-58年)、『真昼の暗黒・松川事件』(56年)、『明けない夜はない』(小説)、『プロレタリア文学史』(上、下巻、理論社)など数々の著作を発表、晩年は治安維持法違反で入獄した同志たちの無罪と救援のための運動に身を挺された。私はこの訪問の際『わが生きがいの原点——獄中詩歌と独房日記——わが若き日の生きがい』(白石書店、1974年11月30日刊)を私宛の直筆による献辞と自署により下さった。

氏は多作家に属し、思想遍歴を経たので文学者、評論家としての氏の全体像を簡単にまとめることはできない。私は1940年に公刊された『耳語懺悔』(六藝社刊)を所有しており、転向時代の思いがリアル・タイムで赤裸々に綴られている。他方では、あの厳しい時代に『戦旗』発行の責任者となって奥付にその名を連ね、多喜二の『蟹工船』を掲載、多喜二の「罪」を自らの「罪」とした共犯をいとわぬ態度など、氏の誠実さのあらわれであった。氏は『蟹工船』中のセリフに不敬と新聞紙法違反の罪が適用され、多喜二の名と並べて訴追された。

さらに『戦旗』全般の発行、編集、印刷の責任者としても、治安維持法違反による逮捕、訴追をまぬかれぬわけにはいかなかった。

氏の風貌と語りは僧籍にあるかのような、心やさしく人間的な方である。

以下、Sは山田氏、Yは山崎である。

Y 今日はお話をたまわり、ありがたく思います。

S お手紙で前にお知らせしたように、ここに籌子さんのことを記しました。

[といわれて、前記、新書版『プロレタリア文学風土記』の156ページを開けてみせて下さった。そこには、「わたしは、蔵原に一度あいたいと思ったが、それは、望まれそうにもなかった。—／ところが、わたしが奥多摩からでてきて一二日目、十一月二十三日の夕方だった。村山籌子—村山知義夫人—が、わたしの家にたずねてきて、「あなたにあいたがっている人がいるから、案内したい」といった。蔵原だな！ わたしは、直感した。ただ直感した。／「すぐいきましょう」／わたしは和服にインパネスをひっかけ、かの女のあとについていった。／近くかと思ったら、彼女は東中野駅に行って、買った切符を一枚わたしにくれた。巣鴨行だった。／巣鴨をおりると、わたしたちは、市電にのった。小石川原町でおりた。／「あなたは、林という名よ、むこうへ行ったらそう名のってください。」霧のある街をゆきながら、かの女はわたしにそっといった。

／つれていかれたのは、停留所の近くを右に折れたさびしい横町の二階建の家で、表札の氏名は忘れたが、古いくぐり門があって、玄関は門から数歩低いところにあった。／戸をあけて、わたしが、「林です」というと、声をききつけて、玄関の間についている階段から、しずかにおりてきたのは、やはり蔵原惟人だった。／「やア」／「やあ」／にこやかな顔で迎える蔵原にしたがって、わたしは、二階にあがった。…／「きょう、あんたにきてもらったのは、もうだいたいの察しはついたことと思うが…」と、蔵原がわたしにもちだしたのは、入党の問題だった。わたしは、光栄にかんじて、即座に応諾した。…／わたしは、出獄してかんじた、作家同盟の空気—緊張と活力にみちたそれが、どこからきているかを、はっきりとした。」云々。

[やまさきは篤子が蔵原には救援者のみでなく、レポであったことがここで証言されたこと、また、山田の生涯における重要な転機が篤子の導きによることを山田自身が語ったことを重視している。]

Y すでにこのように著者によって公表されていたことを私はうれしく思います。

S この日は私の人生の上で最大の意味のある日でした。蔵原のかくれ家にみちびいてくれた生涯一番印象に残っている日なのです。

1931年2月に検挙され11月に保釈で出獄したときで、それは11月のある日というべきですが、祭りの日で国旗が各所にはためいており、新嘗祭の日だったのです。これは確実です。そうした祭りのときを選んで出所させるのが刑務所の方針でした。しかし、私はこの保釈出獄のときに党にはいったのですから、世話はない。

[著書では「十二日目」とあり、「二十三日」に出獄したとはかかれていない。23日に出獄したのであれば、著書のほうの記述と異なるので検討の余地があるが、今となってはご本人に確かめることはできない。]

刑務所では囚人に1級、2級と等級を8級位までつけて階級分けをして、1級はカギがかからない、2級は模範囚です。私は恥ずかしいことながら2級までになりました。

保釈出所のときは、こういう旗日の日に、千人くらいの囚人を整列させ、その囚人を背後において名前が呼ばれるのです。呼ばれると、背後からどよめきがあがるのです。呼ばれた私としては気持ちのよいものではなかったのです。呼ばれること自体も突然ですから、おどろきです。そして、いい子になったような恥ずかしさがあります。これは、昭和6年11月のことではなく、昭和13年2月11日のことです。

Y 逮捕された日取りの全体を改めて教えて下さい。

S 私は、党への拠金はしていたのですが、金額が少なかったので当局の知る所がなかったのか、昭和5年の党同情者事件では他のナルプ（日本プロレタリア作家同盟）の同志たち（小林多喜二、中野重治、村山知義、片岡鉄兵など）のように検挙されず、かれらが保釈で出てきたあとの翌昭和6年2月初めに寝こみをおそわれて検挙されたのです。

逮捕理由はすでに前年（1930）7月に「蟹工船」問題で起訴されていたことのほか、『戦旗』（これには1928年の三・一五事件、二九年の四・一六事件とかを記念するとか、治安維持法への反対とか、当局を批判する論説を数々掲載してきた）のあからさまな発行責任者であることでした。『戦旗』はそのような記念号のたびに「発売禁止」の処分をうけ、警視庁に呼ばれては注意されていたのです。

Y あのような時代に、あのような機関紙に、あからさまに責任者となられて名を示されたことは勇気のあることと思います。よくなりました。

S 私は『文芸戦線』『戦旗』と、いつも責任者となってきました。これで治安維持法にひっかけられたのです。検閲は3日前に納本（計9冊を納本する必要がありました。警視庁3部、裁判所の検事局3部、内務省警保局図書課3部）するのですが、検閲がとくに、厳しいのは警視庁なので警視庁への納本はわざとおくらせておりました。それが後にバレてしまってお目玉を頂戴したことがあります。多喜二の「蟹工船」中の「××××は雲の上」というのを不敬罪だと相手はいう。××××を「天皇陛下」だと警視庁はいい、こちらは「かみなり」とかいってごまかしたのです。

つまらぬ議論だった。こういうことで引っぱられるのは全くなかない。

『戦旗』はそういう困難の中で、山の中で、山の中から発送されたり、わざと支部宛でなく、八百屋さんに送ったり、一般の無名の協力者に送ったりしたのです。そういう無名の人の助けをかりて、あの

『戦旗』は発送されたのです。そうした無名の人のことをわすれてはならないといつも思っています。

[山田氏はこのことを再三、強調された。]

ところで昭和6年2月に、そのような理由で検挙され、同年11月に先述のように保釈で出所、入党して合法、非合法両面のフラクション活動に従事、その保釈の身で公判をうけ、懲役3年の実刑判決をうけ、控訴、それに対して東京控訴院は控訴棄却、さらに私は上告、大陪審は上告棄却をして、1934年(昭和9年)5月半ばに一審懲役3年の有罪判決が確定しました。控訴をくりかえしたのは活動のための時間稼ぎでもありました。昭和9年の頃、私は下獄の準備にはいていました。

昭和9年8月から下獄、市ヶ谷、千葉の刑務所で過ごし、昭和13年(1938)2月11日に仮釈放となり、保護観察処分となりました。獄中で日中事変も生じたのでした。

私には東京も日本内地も息苦しくて満州に行きました。満州に友だちもいるし、心を開放したかった。早くいえば、息苦しくて逃げたのです。渡満して開拓地を廻り、新京で満州新聞社の記者となったのです。鹿地は頭山満の劇団にもぐり込んだが、自分の場合はそうはいかなかったのです。

Y 満州でのことはいかがでしょうか。

S 満州で敗戦となり、ソ連軍につかまってつれて行かれ、ソ連で抑留されました。このことが契機となり、日本新聞の編集をしました。その編集部に『戦旗』がずらっと揃っているのにはびっくりしました。

話は前後しますが、満州時代に、大東亜文学者の古丁^{こてい しやくせい}、爵青を連れて松本正雄の家に連れていったことがあります。かれらに「お互いに細く長く生きようね」と話したのです。私が転向したのではない、このことは生き証人である松本を失ってしまったのは残念です。中国では、さいわいに私はあたたかく迎えてくれました。私は表面上は戦争協力の生活をし、蔭では中国人と親しくして、戦後を見こしてひそやかな友情をつないでいまして、いわば二重生活だったのです。

[ここで山田氏はとくに2冊の本『満州国各民族創作選集』創元社、全2巻、昭和17. 6、昭和19. 3を書架から取り出して示された。]

この選集は戦争協力の姿をとっていますが、文字通りの協力を示したものではないのです。この中にあるショウショウ(小松)という中国人の作家のことを今もって、忘れないのです。

[氏はこの頃の中国人たちを大変なつかしく思っている風にみえた。]

私は1950年にソ連から帰国したので、すでに籌子さんは他界しており、敗戦後5年も経過してしましたので、その他の状況も終戦直後とは随分ちがっていたであろうと思っています。

Y 話を元に戻してお伺いしたいのですが、『少年戦旗』の責任者にもなっておられますが、この編集会議にも出られたのでしょうか？

また、そこで籌子さんに会われるということもあったのでしょうか？

S そのほうの編集会議に出たことは全くありません。あれは、いわば「親の」『戦旗』の一環の中の「子としての」『少年戦旗』で編集責任者に私の名が出たにすぎないと思います。親側の『戦旗』のほうは当然ながら編集委員会や諸種の会議によく出ました。

Y 籌子さんとの出会いとか機縁について伺います。

S 私も上落合に住んでいまして、その時分、仲間たちは、あそこの家、村山の三角の家によく集まったのです。村山の家と私の家との距離は百メートルか百五十メートル位です。佐々木孝丸の家も近くでして、孝丸の2階の部屋もさまざまの会合によく使用しました。村山の演劇といっても、当時は金もなく、手づくりの衣裳を作ったもので、佐々木の奥さんもよく作っておりましたが、多分、籌子さんもいっしょに作ったのではありませんか…。

Y 篝子さんの印象はいかがですか？

S 洋服をずっと着ていました。われわれが訪問するとお茶を出す。しかし、すぐ蔭にひっこんでしまったように記憶します。私の思い出で、もっとも印象にあるのは先の蔵原のかくれ家に案内してくれたことです。

この案内のとき、先では触れなかったことで印象にある、もうひとつのことは省線（今の国電）に乗ったときのことで。私とかの女とは、電車内では別々に乗り、電車の前方と後方に遠く別れて目で合図していたことです。二人が並んでツリ皮にぶら下がるのは危険だからでした。このことは忘れもしません。歩くのも並んで歩くのではなく、かなり離れて見知らぬ他人のように歩くのです。[「あとがきに代えて」を参照]

Y 篝子さんは蔵原のレポでしたが、多喜二のレポだった鹿地亘さんからもぐっていた多喜二が篝子さんと会いたがり、多喜二と篝子さんが喫茶店で会ったことなど教えていただいたことがあります。

S 多喜二は非合法活動中でもインバネスを着て、颯爽としていた。インバネスが目につくことをこちらは憂えると、かえってこれが目につかないというのです。連絡は街頭でおこない、話をするのは喫茶店ときまっていました。かくれ家や個人の家は使われなかった。それは危険が大きかったからです。街頭連絡では、一駅手前で降りて、会うとすれ違って安全をたしかめてから、喫茶店をつかいました。

なお、作家同盟のことですが、ナップ関係ではナルプが当局で内部事情がもっとも分からなかったはず。それは多喜二の霊に対してもいえなかった事情があるし、人々の絆が非常に高かったといえます。例えば佐多稲子や本庄陸男のような人はさいごまで党籍は知られていない。自分の場合も党への少額の寄付か何かはバレていたかも知れないが、党籍は秘匿されえたように思う。中野や鹿地は党籍が相手に分かっておれば、あの程度の反省ではむりで、もっときびしくされていたと思います。あれ以上の拷問をうけていないのは同志のさまざまの秘匿あってのことであると思う。私の場合は、とくに秘匿されたという気持ちです。

来年はナップ50年の年であり、みんな集まろうという話が出ていますが、まだプランが決まっているわけではありません。

Y 本日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

(あとがきに代えて)

山田はプロレタリア文学の時代（1920年代から1935年までの）に最も活躍し最も執筆量の多い人である。創作では代表的な小林多喜二ほか幾人かの活躍した人はあるが、かれらに執筆の機会を与えたのは山田氏であり、それらの人の泥をかぶって支援し、高評しつづけたのが山田氏であった。当時のプロレタリア文学の新聞や雑誌には毎号のように山田の文が掲載されている。『戦旗』はもちろんのこと、『プロレタリア科学』などにも、毎号のように執筆している。

その山田氏との篝子との接点は文字通り、点であって、線にも面にも拡がらなかった。山田氏は息苦しくて満州に渡ったから、その後、篝子の視野から消えてしまった。したがって、この接点はじつに貴重な接点であり、聞き書きである。篝子のように「無名」で資料のない女性の研究には聞き書き以上に大切なデータはすくないので、山田氏からの聞き書きはまことに貴重なものであることを私は自覚している。

なお、お話の中にある蔵原のかくれ家への篝子の案内について、山田氏は私への手紙で次のようにかかれた。それを以下に紹介する。

「籌子さんは、地下潜行の蔵原氏のレポーターを可能な限りで努めていたようでした」が、「1931年11月半ばに私が東京・豊多摩刑務所の未決監から保釈ででてきたとき、私をひそかに誘いだして、当時アジト（秘密な隠れ家）に身をかくして地下活動をしていた蔵原惟人さんのアジト（当時の小石川原町）に案内してつれて行ってくれたとき、お互いに張込みや尾行（特高の）を警戒して、一定の距離をおいて歩くとか、東中野駅から省線電車に乗り、新宿駅で乗り換え、駒込駅で下車するまでの電車のなかでも、おたがいに口もきかず、顔もあわさないように用心しあっていたことが思いだされます。」

村山籌子

——ナップ時代の仲間による——

話し手 川尻泰司（第1回）

（ブーク人形劇場喫茶室）

川尻泰司氏は村山籌子の友人とは言えないが、広い意味での仲間のひとりといえる。その川尻に聞き書きしたいと考えた理由はブークの事務所が一定期間、村山の三角の家におかれ、そこに籌子が生活していたことのほか、むしろ次のことがとくに念頭にあったことによる。

籌子は獄中の蔵原惟人宛の手紙（1932年11月2日、本人日付）の最後に書き添えて「これを書いてしまって、ストーヴに当たっていると、美術家同盟（ヤップ）の川尻東次という若い画かきさんが肺病のために施療病院で死にそうだといい、その弟さんが来ました。私のお話のさしゑや少年戦旗のさしゑなどをかいてゐいた、おとなしい、きれいな人で、子供みたいで、二十五位なのです。私はその人を大変好きでした。大変かわいらしい人ですから。私はしばらくは涙が流れて止まりませんでした。それで新宿へ行って、花をかって、弟さんにもたしてあげました。今頃はもう死んでゐるかも知りません。可哀想で堪りません。彼はもっと生きて、コンムニストとして働かねばならないのに」と記している。「その弟さん」はすなわち「泰司」であり、籌子は兄の東次への見舞いに花を買って泰司氏にもたせたのである。じつはこの蔵原宛の手紙をよみえたのは、1980年以後のことであって、私が、泰司氏にお目にかかったとき、この一文は知らないことだったが、知っていたのは、貧しくして病弱の東次氏と籌子との根深く篤い親交であり、この両名は『少年戦旗』で共に働き、籌子は籌子で、東次の生活のために『子供之友』の挿絵を描かせるという東次支援に力を注ぎ込んだ事実であった。ここでも婦人之友社側、松井志づ子の協力が予想される。本来は、東次が長生されておられれば、やまさきは真先に東次にお会いしたい所だが、早逝された東次に代わって泰司氏にお目にかかることになったのである。このほか、ブークが籌子作品を上演していることがあれば、新事実として確認したいとの期待もあったが、この事実はなかった。

以下、第2回の聞き書き中にあるように、泰司氏は1914年6月15日生まれ、聞き書き当時、64歳であり、兄の東次とは6歳ちがいがいとっているから、1908年うまれとすれば東次は1903年生まれの籌子より5歳若いことになり、1932年は東次24歳ということになる。こうして泰司氏は籌子より11歳若く、友人とはいえないし、東次をふくめて川尻兄弟はかの女の仲間うちと呼んでおきたい。[後に調査すると、東次は1907年生まれ、籌子より4歳若いことが分かり、籌子がかいているとおりの、25歳で死去している。]

第1回は1978年11月16日午後5時30分、予約なしにブーク人形劇場を訪れて打ちあわせのためにお話を伺った。

川尻氏はK、やまさきはYである。

Y 突然に失礼いたします。村山籌子を研究しておりまして、知義、亜土氏とは長らく連絡してまいりましたが、プークとの関係や上落合のトムさんの家でのことなど教わりたいと思ってまいりました。

K 川尻泰司です。毎日、忙しくやっています。今日も、これから開演を致します。

ところで籌子さんや知義さんをよく知っていたのは兄でしたが、早く亡くなってしまった。その兄からいろいろ聞いてはいたし、自分もじかに接する機会はありませんでしたが、しかし、自分はまだ19歳そこそこの若造だった。丁度、プークの事務所を村山の家の上階に置いてもらったりしたので、村山がつかまったときの留守のことをいくらか見分する機会もありました。そんな話を明日致したい。

また、その事務所があった期間なども明日までに正確に調べておきたい。

あなたは、亜土ちゃん、ちゃんといった年齢に相すまないが昔はそうでしたが、亜土ちゃんに会っていますか？

Y はい、よく会っています。昨日も会いました。

K そうですか。それが必要です。それでよく分かりました。明日は3時に会いましょう。

本日は、アメリカよりの公演があるので、よかったら、みませんか？招待券をさしあげます。

[このご好意にあまえて、これを見た。プークの活動状況を体験した夕刻だった。シンデレラと5つのヴァラエティ・ショーである。後者の中にシベリウスの悲しき円舞曲などもあって、うれしかった。尤も、この円舞曲のもっていた元のテーマとは異なっていた。このような上演をこの劇場でみることは、これまで想像だにしていなかったことであり、改めて籌子の功績のひとつであると肝に銘じた。]

村山籌子

——ナップ時代の仲間による（つづき）——

話し手 川尻泰司（第2回）

（プーク人形劇場 4階応接室）

Y 今日もありがとうございます。

K われわれの劇団も来年（1979年）で創立50年になります。それを記念して、やらねばならぬことは多いのですが、何しろ、われわれの仕事はその日暮らしで、次々に仕事があり、人が来てその応接にいとまもなく、そのため、自分の仕事を煮つめてその意義を反芻したり、整理したりすることができないのです。われながら、なさけないことです。それに、こういう劇団は経済的に運営するのが大変むつかしく、50周年を記念したりする仕事ができるかどうか危ぶんでいたのですが、漸く、今年の6月に劇団の基礎ができて、50周年の冊子を編むこともできるようになったという恥ずかしい状況なんです。まあ、いろいろの資料をつくって1980年の今頃までに50年記念の本ができればとかがえているのです。本当は40年にやりたかったのですが、それはできずに恥をかいてきたわけで、今回は是非、やり遂げたいのです。

Y 先駆者というのは、いつもそのようなことになると思います。[と、やや、なぐさめ気味の相い槌をうつ。]

K プークで一貫して仕事をしつづけたのは私ひとりです。

ここでPukの創立から少し申し上げます。わがプークはエスペラント語のラ・プーペ・クルーゴを省略して名付けられました。

1929年（昭和4年）に人形クラブとして発足、1979年が50年になるわけです。

1931年（昭和6年）10月9日、10日に第4回プーク公演を築地小劇場でおこないました。出し物は「勇敢なる兵卒シュベイク」と「三人のふとっちょ」（これは島公靖の本）の2本でした。この公演のあと、当時、劇団の事務所のあった山谷におれなくなったのです。山谷という駅が小田急沿線にありましたね。いまはありませんが…。

なぜ、そこでやってゆけなくなったか？ その理由は3つありました。

第1は創立者である兄の川尻東次の結核が悪くなり、千葉県の田舎に療養に出かけたりの合間に公演に参加はしたのですが、また急に入院したりするという状態になりました。

第2の理由は当時の創立メンバーの多くは東大、慶応義塾の学生たちでした。相前後して卒業する時期がやってきて、卒業すると気楽に劇団の仕事をやれなくなります。川尻東次のほか、大学をやめた少数の人たちだけでは、すべてをカバーすることが困難になりました。

第3の理由です。上のふたつが内部的理由とすれば、これは外部的理由といえます。当時の政治的情勢から、上演について各種の困難があり、弾圧もあって、劇団の経済的困難も一層深刻となり、山谷の事務所を維持することができなくなったのです。

そこで兄の意向で籌子さんと話してプークの事務所を村山の「三角の家」に移すことになったのです。言葉は悪いのですが、「ころがりこむ」（安い家賃で貸していただく）という形になりました。村山は監獄にいたので、留守にころがりこんだのです。

[あとで述べられるように、プークの事務所が三角の家にあったのが昭和6年11月から昭和8年12月までだとすると、入居の昭和6年11月はトムさん入獄のときではない。しかし、泰司氏は村山が家にいなかったことをくりかえし強調しているので、のちにも記すように、なぜに長く家にいなかったのかを調べる必要があるとやまさきは思う。]

そこはいわゆる落合解放区の中心ともいえる場所であり、その「三角の家」の「用心棒」といえば聞こえはよいが、そういうことになったのです。

その家で、プーク劇団の仕事をしていたのは私の同世代の人間で、そこでプーク戦前の最後の活動がおこなわれたので、メンバーを紹介しておきます。

第1は私、第2は富田寅之助（本名）で筆名は富田露彦、第3は高山貞章（本名）で筆名は中山はじめ、たくさんありましたが、かれは東次よりも年上で、長男（長兄のこと）と同じ位だったのです。かれは現在、わらび座の文芸部にいます。こういうことでプークに一貫している人はほかにはいないことになりました。第4は鳥山椿名です。この人は戦後は文部省で、なんとか課長などをしました。第5は中村伸郎です。もとは小寺という姓でした。この人は三角の家に移る以前に、すでに新劇に移っていました。

第6に潮田租という人。三角の家時代にいました。現在は、団体保険の会社にいます。才能のある人でした。

そのころは〔と泰司氏はいわれて、いくつかの公演パンフレットか散らしの類の現物をもってこられて、それをみながら、ここにこのようにと示されながら〕第2回「戦旗」の夕、19日、20日、第3回「戦旗」の夕10月31日、11月1日というように「戦旗」の宣伝に合体して、つまりプロットやコップなどと合同して上演していたのが、この事務所の時代でした。[パンフレットには年号の記入がみられなかつ

た。精査する時間もなかった。]

高山という人は一高を途中までやって止めたような人でした。

これは [とわれてパンフレットか散らしをみながら] パンチ座第1回公演のもの、パンチ座というのは子供のためということで、プークの別称をもつことができたのですが、プークという名前では活動困難であったときにプークの別動隊として動いていたのです。

ここに昭和6年12月27日のこととありますから、三角の家時代です。[あとで調べると、演目は「お月様の話」ほか]

また、このパンフレット、人形クラブ第5回公演（共同大公演）ですが、5月28日、5月29日となっています。これも三角の家時代ですね。[あとで調べると、演目は「黒色靴」]

また、この通りですが [といて泰司氏は一冊のガリ版刷りのパンフレットを示して]、この「指人形の作り方」というタイトルの小冊子は住所が淀橋区上落合一八六人形クラブとなっているでしょう。これも同じです。[この淀橋区上落合186は籌子が何十通、何百通となく人に宛ててかいた手紙の発信人の、やまさきになじみの住所であり、東京空襲で焼失する籌子の、本来なら永久の住居、つまり「三角の家」のアドレスであった。]

Y その186番地におられたプーク事務所と籌子さんとの関係はいかがでしたか？

なにしろ一軒の家の中のことですから。

K その期間は昭和6年11月から昭和8年12月までです。事務所と籌子さんとのあいだに直接の交渉はありません。当時はああいう時代なので必要でないことに深入りしないのが鉄則でした。それに自分とは年齢の差もあり [計算してみると11歳の差]、話をするには相手はおばさんです。

Y [ここで『女人芸術』誌上の籌子の写真をおみせして、本人にどの程度近いか、をお訊ねした。]

K これは私が知っている籌子さんより、ずっと若い。当時はもっと老けてみえました。

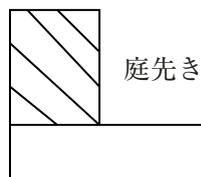
「三角の家」では、犬の散歩をしてくれとか、エサをやってくれとか、程度の関係でした。あるいは向うで庭を歩いているとか、何かを燃やしていることを望見する程度です。ですから、当時、かの女が何をしているのか、どんな人とつきあっておられるのか、そんなことは全く知りませんでした。私はかの女の作品（児童文学上の）を全く知りませんし、こちらで人形を作っているときでも、かの女はこちらに全くやってこない。ですから、かの女をみた印象くらいしか、分かりません。

Y その印象はどんなものでしたか？

K 新しいタイプの女性とはこういう人であろうということ、おかつぱにしてサバサバしているし、物をはっきりいう。一般の女性とはちがうあたりしきがありました。また、こまかい心遣いがある人だと思ったのでした。

Y 庭先に出ているのがみえたということですが、どんな家と庭との（平面図で示すと）状況でしょうか？

K この斜線の所にかの女が生活してまして、こういうL字の家の下のコーナーにある部屋を事務所が借りていたのです。



庭の部分に斜線から籌さんがでてこられ、魚を焼いたり、落ち葉か、チリとか、ゴミとか、何かを

焼却しているのがこちらからみえますが、そういうとき、こちらから、でかけて行って話をしたりするのでなく、一寸、望見（遠見）するぐらいだったのです。

Y 同じ家にも、ほとんど、つきあいのなかったことがよく分かりました。

K それに私は当時、写真の通信社でカメラマンの仕事をしていたのです。人形劇だけでは喰えないので、そういうアルバイトをしていましたから、昭和7年、中学を卒業したあと、目白に住み、そこから「三角の家」に通っていました。それですから、私自身は籌子さんとの接触はすくなかったのです。

しかし、仲間のなかに、かの女との接触が自分よりもあったと思われる2名の人物を紹介します。

ひとりはおおともへいざえもん^{おおもとへいざえもん}もろえだ^{もろえだ}という筆名をもっていました。彼は「三角の家」にしばしば（毎日のように）泊まっていました。住居もそこにあったといえます。私よりはずっと籌子さんと接触があったと思われませんが、しかし、かれはすでに死んでしまいました。

もうひとりはおおやま^{おおやま}きょうだいせん^{きょうだいせん}という人で、日本名は大山、本名は姜大山かもしれませんが、このひとにもそこに泊まっていたので、籌子さんをよく知っていたと思います。戦後、かれは北朝鮮に帰り、自分の子供に村山の名前からとって名付けたということを聞いています。[この人に会うと、当時のことが分かるかも知れないとの泰司氏の口吻であった。]

このふたりは籌子さんと個人的に接する関係にあり、その機会が多かったと思います。大山はPM（音楽家同盟）の仕事をやっている、資金を得るために納豆売りをしていました。その頃の納豆売りやストライキにはおもしろい話があるんですが、時間がないので今日はやめましょう。

当時の運動は1933年後半になると、おさまってくるのですが、あの頃の「三角の家」はデカがやってくるので、われわれはさまざまな資料をかくしたり、屋根にのぼって、向うからやってくるのを望見して警戒したり、犬のプンタが大きな声でデカにほえたりして、にぎやかでした。

Y プークの事務所がその「三角の家」を離れたのはどういう事情からでしょうか？

K それにはいくつかの理由というか経緯がありました。

第1は1932年11月26日に兄の東次が死去したことです。私はその頃、事務所務めなのですが、11月20日に通称ロイス（日本人ですが、いま名前がでてきません）という男と共に中野警察署に検束されていまして、11月27日にだされ、病院にいったのでした。

兄の東次は自分が知らないとき、昭和5年、6年の頃、籌子さんにお世話になっていたと思います。それはPP（美術家同盟）とプークの仕事を兄がやっておりました時期です。そのうえ、兄の童画家としての活動のひとつに『子供之友』にかかせてもらったのも籌子さんのお陰ではないか、と思っています。

兄はまた開成の後輩として知義を敬愛していましたし、岡本帰一のふたりの弟子、松山文雄と共に東次が弟子という関係のなかで知義と岡本の影響をつよく受けながら、その本来の仕事がはじまりかけようとしたときに、死去したのでした。

[ここで泰司氏はプーク30号記念パンフレットを係の者にもってこさせ、知義の文章「東次と泰司」をみながら、そこに東次の絵に籌子が一目おいていたくだりをよみきかせていただいた。プークのパンフレット第15号、1959年8月9日刊。]

こういう関係のあった村山家と東次とのことですから、東次の死から「三角の家」との縁にたよれない事情がうまれたように思います。

「三角の家」時代の最後は1933年12月23日、パンチ座第2回公演です。この公演のための人形作りやケイコは「三角の家」でしました。出し物は人形劇「ドン・キホーテ」でした。これがおわって、そこ

そこに上落合を引き揚げたのです。私が籌子さんに逢わなくなるのもこのときからです。

第2は村山さんが監獄から出てきて、それが契機でわれわれが「三角の家」をでたということもあります。この年のおわりに村山さんは娑婆に出たのでした。

[泰司氏は先にも触れたが、「三角の家」にはいったとき、つまり村山家に御厄介になるべく荷物をもって行ったとき、知義さんはいなかったこと、ここで、くりかえして強調されて、しかも、家を出るのは村山知義が獄から「帰宅」したためとされ、はいるときも出るときも知義の動きと裏表関係で連動しているかのように述懐された。]

私はかつて知義さんがプークについてかかれた文章のなかで、まるで知義さんが在宅でもしていたかのようにいわれていて、それが不思議でならなかったし、いまでも不思議なのです。われわれが「三角の家」にいたあいだ中、知義さんがいたという記憶がないのです。

[この泰司さんの発言にはやまさきの理解しがたい箇所がある。村山知義は昭和5年は5月から12月まで入獄、さらに昭和7年6月から昭和8年12月まで入獄した。そのため、プーク事務所が「三角の家」にはいった昭和6年11月は知義の娑婆の時代で、そのあと昭和7年3月までは「三角の家」にいたとみられる期間であり、この4ヶ月間、つねに家にいなかったという事実がありうるか、この発言の根拠は何であろうか。知義、泰司双方の側について、さらに調査しなくてはならない。知義がある期間、下落合に住んだという説があり、あるいは、そのことと関係があるやも知れない。籌子は終始「三角の家」に住んでいた。]

自分と兄とは年齢で6つちがいでした。私は1914年6月15日うまれですから、そこから兄の年齢は推定できると思います。兄の生年月日は一寸今は頭にうかびませんが兄と籌子さんの年齢のちがいは、そこから凡そそのところは分かると思います。プークと籌子さんとの関係は何よりも兄の東次を介してのことでした。

Y 童話作家としての籌子についてはいかがでしょうか？

K 私は全く知らないのです。

Y そうすると、かの女の作品を上演したこともないのでしょうか？

K 上演したことはありません。[と、きっぱりとしたご返事であった。]

Y 今日はありがとうございました。ご多忙のところ、2日間にわたり、貴重なお話をたまわりました。お礼を申し上げます。

(あとがきに代えて)

川尻泰司氏のお話は内容ゆたかで、生活のうえでも、人形劇運動史上のことでも、体験された知見や感懐をお伺いするには時間不足はおおいがたいだけでなく、ご本人が諸事情を確かめたり、反芻する時間的余裕がなく、現役としての日々の仕事を推進するのが何よりの本務であり、突然の訪問者やまさきに会って、これだけ回想していただいただけでも感謝しなくてはならないのである。

したがって、知義と籌子との関係とか、東次の絵画とか童画とかについて、くわしくご所見を伺うことができなかつたし、ナップ、ナルプ、コップやプロットや美術家同盟などについての印象などについても聞けなかつた。世代としては若いとはいえ、8月15日までの戦中には獄中にあった泰司氏の体験はあまるところなく、後代につたえられなくてはならないと思う。

その後、「人形劇団プーク創立50周年記念カレンダー 1979年」を入手し、プーク50年の歴史と主たる上演目を知りえたのだが、1937年から1947年は本公演がなく、弾圧された跡はあきらかである。1940年に

はプーク人形工房の全員が検挙された。カレンダーには東次の見事な自画像や東次作の糸繰り人形（1929年）リップ・ヴァン・ウインクルの小人A、B（プーク第1回公演）が掲載されている。籌子が意気投合してこれを眺めたであろうと思った。このカレンダーによると創立者、東次は1907年に生まれている。死去は1932年であるから、わずか25年の生涯だったのである。私は東次の村山槐多ばりの画才について籌子にふかい思い入れがあったことを確認した思いである。

なお、川尻泰司は「プークの60年」（『民主文学』1989年12月）で「村山知義のダダイズムの影響を受けた青年たちを中心に創立されたプーク」とかき、60年の苦闘を語っているが、紙数を限られて60年を圧縮して述べるをえず、これには「三角の家」時代についても、籌子についても一切、言及がない。

村山籌子

——村山知義の直弟子による——

話し手 松本克平氏

1987年11月20日（金）午後3時から5時

東急イン及び市民会館楽屋にて（いずれも高松市内）

（前がき）

東京の松本氏に手紙を出した所、公演（チェーホフ原作「かもめ」文学座への客演）で高松に行くのでその折、お会いしたいとあって来られて、会うことになった。松本氏は俳優ではあるが、文筆家であり、新劇史の本格的な研究家である。

Y 今日ありがとうございます。

Y おとしはいくつになられましたか？

M 自分は81歳だよ。〔明治39年4月25日生れ、長野県、本名は赤澤義巳〕

Y 現役であることがすばらしいです。

ところで、籌子と知義との関係のことですが・・・。

M そうですね。籌子さんは芸術的感覚の鋭い人でトムさんはかの女によってささえられていたのではないのでしょうか？ 芝居（脚本）にしても演出にしてもトムさんは籌子さんの批評をもっとも大切にしていました。トムさんはかの女から最も勉強できたはずだ。ですから、かの女の死はトムさんにとってじつに痛かったはずですよ。

かの女のいなくなったあとのトムさんの作品も演出もすべてユルミがあります。

Y 籌子さんはどういう人ですか？

M かの女はわれわれ劇団の人たち、われわれ役者たちに会おうとしなかった。その点、近代的なエゴイストといえるかも知れぬ。すっきりとした所ありだが、夫が世話になっているという形で劇団の人たちにペコペコしたりお世辞をいう人ではない。ぼくらもなんとなく遠慮していたのです。

Y しかし話をしたことはあるんでしょう？

M それはある。しかし、一寸した用件とか口ききていどだ。深入りはしません。だからぼくは、かの女のことをよく知っているとはいえない。

Y かの女は社交家ではないと思うんです。

M そうです。ぼくは村山直系の生き残りで、もっとも年長だね。

村山はキリスト教のいえきょうもあってじつにひろやかで、大きく連れいする人だ。

久保栄とちがうところですよ。久保はセクト主義だ。

Y といいますと？

M それは例えば久保は東宝の資本で滝沢修（オサムちゃんという）と薄田（ススキダ）研二とで劇団をつくった。村山が入団を希望すると、ヒラ団員なら入れる、というんだね。村山は断った。無論。そういう所が久保にある。

それで例の東宝争議があって久保にとっては大変なことになる。東宝資本で自分だけで劇団がやれると思う所がセクト的なんだね。このことが争議で破綻したんだ。村山とは全くちがう所なんです。

Y 籌子さんについて印象的なことは何でしょうか？ ほかのことで？

M そうですね。コップ弾圧のとき、監獄にいたトムさんが監獄の中から書記か執行委員かのプロットの役員をおりするという辞職ねがいをかいてきたんだね。その折、非合法の党はどこにあるかは分らないので、ただ、まわしよみをして、みんなおどろいていたわけだ。そのとき、籌子さんが涙を流して「情けない」と泣いたことが忘れられないね。

ところがそれは村山のひそかなハカリゴトであって、出てきて党と無関係に芝居をすることが大事だと考えていたんだね。そのことにみんな気がつかなかった。党ときりはなさない芝居ができないんだ。村山は芝居が全くなるより、芝居をやることを考えたんだ。

村山は出てきて大同団結の協議にじっと耳を傾け、みんなの意見をきいているんだね。ちゃんと再起を考えているんだ。すごいと思った。

Y これはいい話だと思う。大同団結の話はよくきいていますが、籌子さんの泣いたことはいかにもかの女らしくてじつによい。〔山崎はこれに近い話はすでにきいていたが、村山に親近感のある人からの話ははじめてだ。いままでにきいてきたのは、知義のウラギリ、転向と籌子の嘆きというふうなのが多かった。〕

トムさんの男女問題はどう思われますか？

M そう。これは籌子さんとの結婚前からありました。有名なフリー・セックスの女性、おどりの人も含めて。劇団の人とも。しかし、これはよくあることで、トムさんをつよくわるいとはいえないね……。

トムさんはちゃんとセーブしていた。〔克平氏はトムさんに弁護的姿勢をとる。これも一般の論調と異なる。〕

Y トムさんはやはり偽悪的に自分をかいているのですか？

M そう思う。偽悪的だと思う。あれほどとは思わない。

Y さきほどのコップの所、トムさんの自伝にもでていますか？

M まだテーマがそこまではいっていないと思う。それは時期的にみて、また大分、前の所ではないか？

Y 先生の社会主義演劇論に出ていますか？

M 厚い本の方にてているはず。

Y 原泉子さんにあわれることがありますか？

M この夏、ぼくの自伝の出版記念会に来てくれました。あのね。『白夜』はね、籌子さんの筆が大いにはいっているということ。これはトムさんが酒によっぱらうと、いつも大声で、あれは籌子さんのものだといっていた。

もっとも、はじめの筆はトムさんが書いたわけだ。しかし、あとで手を入れたのが籌子さんね。

Y 松尾哲次さんはよくお知りですか？

M あれはぼくと左翼劇場で同期生。いつか新聞で、かれの死を知りびっくりした。お葬式に行こうと思ったが、鎌倉で、ここからは遠くて間にあわないんだ。つらかったね。

Y 村山知義と久保栄との関係はやはりライヴァルかんけいですか？

M あれは最初はトムさんがずっとひきはなしていたのですね。それがやっと「火山灰地」で追いぬいたという感じになった。

Y トムさんの作品と久保の作品とはどう比較されますか？

M これは一寸いえないね。村山のものはどういべきか……。

Y スケールが大きいのと、テーマがひろがりがある。

M そう。応用がきくね。

あの「初恋」でもオニールの翻案でも、ひろがりのある力量があるものをやったといえる。別のことですが、さっきの原泉水ね。さきほど臼井吉見のおくさんが死んだとき、原が知らせてくれたね。臼井はぼくと中学は同窓でね。よく知っているんだ。臼井が中野の原稿をもらうために玄関で長時間がなばったという話がある。[ここで古田晁のことも話にでたが、その脈絡は今はっきりしない。山崎注]

M 今回の公演は急にきまった代役でこれから冬の北海道まで大変だよ。文学座のソーリン役（「かもめ」での役柄）の人が入院してね。この芝居、サンシャイン劇場で30日位やったんだ。どう買いついたのかは知らないが……。

ぼくはいま81だ。みんな次々に死んで行った。村山の直系弟子の、ぼくは生き残りの最上級生だ。

Y 佐々木孝丸さんは？

M あれは村山の弟子ではない。芝居では、村山より先輩です。佐々木はその以前から芝居をやっていた。

[本日の話の冒頭でいわれたこと]

M あの籌子さんの妹だったか、大阪に嫁いでいた大阪のパン屋があったね？

Y はい、それは丸木パンという大きなパン屋さんです。

M 名前は知らないが、そのパンを劇団にさし入れてくれたように思う。大きな店だった。

Y その妹さんは尋^{ひろ}という人です。いまは高松に帰られているときいています。

M 岡内家は怎么样了の？

Y それは勸弘堂、アピー、薬局、ドラッグといろいろにわかれ、それぞれ発展しています。

それとはべつに籌子の墓の件ですが、かの女の墓の脇に村山の碑が建っています。清州さんがその一存で分骨したのです。みられるとよいのですが、一寸、急坂です。本日、公演がなければ行ってみるのも一案ですが……、[と誘ってみたが、とくに行きたいとのそぶりはなく、つよくはすすめなかった。]

かつて東京の松本正雄さんが名古屋を経てわざわざ墓をお訪ねになり、ご案内したことがあります。あの方はじつに感銘しておられました。

M ああ、アメリカ文学の松本さんですね。

Y そうです。[やはり、よく知っておられる。克平氏が一般の役者でないことがわかる。]

私としては来年、上京の機会があれば先生（日頃つきあいのない大先輩は先生と呼ぶことにしている）に連絡してゆっくりに伺いたいのです。いいでしょうか？

M いいですよ。あらかじめTelして下さい。空いてればお会いできます。[こういわれたが、翌年、上京の折、何度か連絡してお会い下さる機会をつくって下さることをねがったが、そしてその後も上京の

機会に幾度か連絡しても、時間がとれず、結局、私的にお会いすることはできなかった。この聞きがきが最初で最後になった。]

(楽屋で)

Y この小瀬格(本名)の「格」は「新居格」の「格」ですね?

M ああ、あの人ね。無政府主義者だったね。[やはり一般の役者とちがいで、よく知っておられる。]

Y それはどうしてですか? [松本氏が私の目の前で、こんな話をしながら、色紙をだしてソーリンの肖像を絵具をつかって画きはじめた。]

M これね、たのまれてね。ここの市民会館の方からですね。[かなり細かく絵をかく。これは趣味らしい。気分転換にもなるだろうと想像される。]

Y こんどの芝居。12月末までですね。

M そう。ことしの年末はこの芝居でおわるんだ。大変だよ。

(以上で、この日の聞きがきはおわった。短時間であったけれども重要な証言であった。その後、トムさんのスクラップ帳の一冊に克平署名のものが古書店に現れて亜土のもとに貸しだされたし、私自身も克平氏が保持されていた貴重な資料を古書店で購入した。とくに戦前の新協劇団や左翼劇場、プロット時代のトムと籌子の思い出は貴重である。)

[文中、「厚い本」が松本克平著『日本新劇史——新劇貧之物語——』(筑摩書房刊、1966年、本文655ページ+歴大な写真ページを有し、700ページを越える大冊)であるとすれば、それにはコップのことも、新協劇団のこともでていない。むしろ、松本の自伝である『八月に乾杯』(弘隆社、1986年)には、くわしく述懐されている。]

村山籌子

——自由学園時代の同級生による——

話し手 千葉貞子

1977年11月9日、12時20分～13時

(婦人之友社にて)

(前言)

千葉貞子さんは当時、婦人之友の編集長、同社の現社長も務める文字通りの全責任者である。旧姓は内藤であり、自由学園高等科第1回生であり、籌子の同級生(36名中のひとり)でもあるのだが、籌子とは特別の友人関係ではなかったもので、同級生の表現でしるしたい。

松井志づ子は元編集長でもあり、病気で静養中の松井さんを千葉さんは婦人之友社の立場から見守り、お世話する側にあつたので、やまさきはかつての籌子の親友、松井さんにお会いしたいとする立場から、千葉さんのご意見を伺うことを中心にお会いした。これより先に、松井志づ子さん宛のやまさきの手紙への返事(はがきによる)に、松井さん本人からでなく、千葉さんからの代筆で、本人が逢えないという趣旨の文があつたことも、この日、千葉さんに直接お会いすることになった理由である。

Yがやまさき、Cが千葉さんである。婦人之友社ロビー(事実上は廊下)に椅子を出して話しあつた。

Y お返事ありがとうございました。

C 松井さんは老化現象で話をきいても記憶のはっきりしたことはよくおぼえておられますが、いまは考えて物をいうことができないのです。老いは人によっていろいろの姿をもっています。松井さんは松井さんの姿をとっていますね。

Y 松井さんの生活を現在も友社の側から、いわば公的にお世話をしていることを知りませんでした。

C 今は私共から女中さんをつけて世話してもらっています。あまり歩くこともしていません。外出もされていません。

そういうことですが、お逢いになりたいのであれば、お逢いに行ってください。どうぞ。私から、今回はお逢いになることをおことわりすることはいたしません。ともかく、先方次第です。今日の所は、あの折の、お返事のように考えておりません。

[聞いている限りでは、周囲が(未婚で子供のいない松井さんに法的な養女があり、そのムコ殿)、老いた女性の姿を他人にさらけださないように配慮している感じであり、本人の意向とは無関係のように思われた。]

Y 近藤きよさんには名古屋でお目にかかったことがあります、いまは東京でしょうか？

C 東京にいられています。

Y 河野俊子さんは？

C 横浜におられます。この人は変人で、あまり友人づきあいをしませんし、名簿にもTEL番号もありません。

[かつて松井さんからこの人は自由学園卒業生名簿から自分の名前は削除してほしいといわれたことを告げられたことがある。それを思い出した。しかし、『婦人之友』誌の編集に協力して、しばしば記事を寄せている。]

籌子さんをよく知っているのは、松井さん、秦(近藤)きよ、石垣さんです。まだ、逢っていないのであれば、石垣さんに逢うことをおすすめします。

Y ところで、当時、自由学園高等科に学生のクラブ、あるいは部活、サークルのようなものはおありでしたか？

C それはありません。何しろ、小さな学校ですから、すべてのことをすべての生徒がいたしました。

Y 自由学園の生徒の自主的な雑誌、文芸誌とか趣味とかの？

C それもありません。のちに学園新聞が出されましたが、それはのちのことで、われわれの時代は何もありませんでした。

Y それとは別事ですが、卒業証書はミセス羽仁の内筆ですね？籌子さんのをみると、直筆です。

C そうです。あれは全部、すべての人の証書にミセス羽仁先生が自分で署名したのです。

Y 今日はありがとうございました。

(あとがきに代えて)

数分から10数分間位の約束だったので必要なことはすべて伺いえたと思う。その後、千葉貞子さんについて、別の方から、くわしくお教え下さったことがあり、自由学園、婦人之友社、さらに羽仁家と千葉さんとの関係に絡んでの松井志づ子のなやみと発病に関心を抱いたのであるが、籌子の親友、松井さんの生涯にどこまで立ち入るべきか、考えあぐんだことがある。この日、千葉さんから石垣綾子に会うことをすすめられたので、それまで友社に気がねして、自制していたやまさきは心おきなく石垣に会うことになっ

た。改めて千葉貞子さんに感謝したい。

松井志づ子のこと

村山籌子の親友のひとりという松井志づ子は、明治35年5月に東京桜木町に生まれ、昭和56年9月に東京郊外にて逝去した女性であって、生涯、婦人之友社と共に歩みつづけ、その立場において献身にあけくれた日々をおくったのである。

かの女の葬儀（9月30日）に際して、婦人之友社編集部の後輩である渡善子は「お送りすることば」をよみ上げ、松井の人となり功績を讃えた。以下はその折の全文である。文中にみられる「まずくいけば我が事として悩み、苦しんで、見放すことのないリーダー」、「自分がその矢面に立って、未熟なものたちのためにとりなし、自ら深手を負って下さる」、「美しいもの、善いもの、目立たなくても本当に優れたものに深く魅せられる松井さんの天性の感受性」とかは、松井を表現するにふさわしい形容であり、それあればこそ今日の『婦人之友』誌も、友社も、あるいは友の会もあるとおもわせられるのであるが、同時に、村山籌子という純粹ではあるものの、それだけに厄介な友のうしろ立てになられて、友社の側から、ほとんど例外的に受難の籌子を支えたのであった。

松井志づ子については、別の機会に一文を草したいと考えている。文中にある松井の妹マサ子の最期を手取った主治医の塚原俊雄は村山知義の同級生であり、また籌子の信頼した主治医でもあって、ふたりの交友のふかさを塚原という存在が示している。塚原は私に対して松井の妹のことを、みずから籌子の主治医であったことに重ねて私に述懐されたのであった。ここには、この貴重な「ことば」を再録して、松井の仕事と人柄を偲び、あわせて俗人を徹頭徹尾、敬遠した籌子が松井をつよく愛しとおした意味におもいをひそめたい。

なお、渡善子は山室軍平の息女であり、同じく息女であり、妹君である山室徳子のご好意によりこの文章に接しえたのである。このご両人に心より感謝申し上げたいと思う。（山崎 怜）

松井志づ子さんをお送りすることば

敬愛する松井志づ子さんをお送りする日がついに来てしまいました。

婦人之友が羽仁両先生の御家庭に誕生して以来今日までの八十年近い歴史を顧みますと、その中の六十年間を、松井さんはつぶさに御存知であり、その歴史をつくる中心の一人として働き続けてこられたお姿が、人々の心の目に、又お仕事の上に、はっきりとやきついております。時は移り、人は変わっても、その尊いお志と足跡は、いつまでも婦人之友の中に残るでしょう。

自由学園の創立を告げる羽仁もと子先生の夢と希望に溢れることばを、母上の愛読誌婦人之友に発見して、当時勉学中であった聖心専門部での学業を捨てて、心躍らせて学園の門を叩いた松井さんは、その後も両先生の導きのままに、いつも“さらによき道”を目指し、苦勞を苦勞ともせず、ひたぶるに歩み続けてこられたのでした。

婦人之友の発展期、自由学園の成長期、友の会の建設期が重なりあった昭和はじめの四半世紀余を、ミスタ羽仁は“黄金時代”とお呼びになったと伺いますが、松井さんは両先生の最初の教え子として、若い

生命をかけてそのお仕事を担ったひとりでした。私も松井さんのお教えを受けた多くの後輩の一人として、〔貧〕しい思い出に托して感謝をささげさせて頂くこととなりました。

松井さんを先輩として学園卒業生の中から、友社のお仕事をお手伝いする人びとは年毎に加わり、十回生の私共の頃には、編集部には、六、七人になっておりました。私共が生徒のころ、ふくよかな笑顔に和服姿でと覚えていた松井さんは、その頃は清楚な洋装で、豊かな髪の毛もさっぱりと短くして、見るからに活動的でした。生活合理化展を機に、そこに主張されている婦人の服装の合理的な計画を、みずから実行するために率先して洋服になられたということでした。

私のように、挨拶の仕方もろくに知らない幼稚な者にも、松井さんは実に温かく、しかしとても厳しく、正直につき合って、ことごとに教えて下さいました。若い者一人一人を愛して、持ち前の力が出せるまで研究させ、書き直させ、とことん一緒に考えたり、頁を組み直したり、そして、よく出来れば誰よりも共に喜び、まずくいけば我が事として悩み、苦しんで、見放すことのないリーダーでした。

つねに理想を高く持たれる羽仁先生のお考えのように、事が運ばなくて先生が激しく叱れる時にも、松井さんは自分がその矢面に立って、未熟なものたちのためにとりなし、自ら深手を負って下さることもしばしばでした。

それは松井さんの強さからではなく、優しさから自づとそうして下さったのであったと存じます。それだけに御自分はどんなに苦しく悲しいことも多かったか、またお体も知らず痛められたことがどれ程だったかと、自分も年令を加えて、ようやく御苦勞の一端をお察しするにつけ、申し訳なさと感謝とが深まってまいります。

美しいもの、善いもの、目立たなくても本当に優れたものに深く魅せられる松井さんの天性の感受性は、婦人之友の記事をえらび、執筆者をお願いし、又、ある時は折角頂いた原稿をおことわりせねばならない時にまで、正しい取捨選択の基準ともなり、力となっていました。

平福百穂先生のあとも、清々しい高雅な表紙絵を婦人之友の伝統とすることができましたのは、ミスタ羽仁の御指図と共に、松井さんの本当のものを見出す明るいその目に負うところ大であったと存じます。川合玉堂、奥村土牛、安井曾太郎氏をはじめ、文芸では野上弥生子、大佛次郎、中里恒子、福永武彦氏、歌人の若山喜志子、真の評論家の先駆であった長谷川如是閑氏、どの方も羽仁先生の代りとしての松井志づ子さんを、婦人之友の代名詞のようにお名を覚えておられました。

“つかわされた者”として、誠心誠意つとめを全うしようとされる松井さんの熱意と、あたたかい信頼を相手に託するお人柄に、有名無名を問わず多くの友が心をひらかれ、それが著作集の発刊を機会に、読者の集まりから友の会が各地に生まれるという、自然なよろこびを生み出す助けともなったのだと存じます。

“にこやか”と誰もが松井さんについて申されますが、私はそれは松井さんの涙の多き御生活に裏づけされていたと思わずにおられません。

関東大震災の時、すでに病床にあった母上と弟妹を守ろうと、必死につとめた日々の涙ぐましい記録が古い婦人之友に出ておりますが、その母上も、父上、兄上も病没され、うら若い身で仕事の他に時々ふるしきの合間からセルロイドの鉛筆入れがすべり落ちて、消しゴムやペンが散らばることがあっても、寝る間も惜しんでかけ廻る松井さんの大きさを知る人達は、微笑む他はないのでした。

戦時中、言論の自由と真実の教育を守るために、羽仁先生の意を体して、文字通りの矢面に立たれ、戦後の再建期の困難な出版事業に又新しい力を注がねばなりません。ことに昭和三十年、突然のミ

スタ羽仁の御急逝、続いて三十二年、ミセス羽仁の御永眠という思いがけぬ打撃に、婦人之友の将来を案ずる声も大きかった中で、誌友、愛読者、友の会の友情を支えとして、千葉貞子さんと共に今日の婦人之友社の基礎を築かれた功績はまことに大であります。

高さあこがれに心に向け、次の一步にいつも大きな課題を置いて、明るい勇気を持って取組んでいらした松井さんこそ、「使命の道に殉じた私たちの姉、おしたいしてやまぬ尊い先輩」であられました。御納棺には婦人之友、明日の友、そして著作集の一卷を、そっとお手もとに置かせて頂きました。

幸いなるかな心の清き者、その人は神を見ん——、このみことばが思い出されてなりません。

今日は、羽仁恵子先生をはじめ学園の先生方、在校生、松井さんの同級生をはじめとします卒業生、松井さんを存じ上げない若い社員たちと共に、松井さんをふかく愛惜する旧社員や友の会の方々が遠い地方からお別れのために、ここに集っておられます。

秋の高原で松虫草やききょうなど、紫の花に声をあげてその中に立ちつくしていらした松井さん、よく口ずさんでおられた羽仁先生の野の花の歌が、ここにも響くように思われてまいります。

光に顔を向け、純真、素朴な善意に生き続けられた故人の面影が、どうかこれからの婦人之友の姿そのものとなり続けますように。羽仁両先生と共に神のみ許にあられて、後に続く私どもをいつまでも導いて下さいませ。

敬愛する松井さん、長い長い間、ほんとうに有難うございました。

昭和五十六年九月三十日

渡 善子

(あとがき)

松井志づ子(1902-1981)について、山崎はこれまで二度にわたり、自分としては重要な言及を試みてきたので、ここに附記しておきたい。

第1は松井と籌子の友情のあり方と死の一ヶ月余前に籌子による最期の松井への手紙の紹介記録である。山崎「続・村山籌子(1903-1946)をめぐって」(『香川大学一般教育研究』第48号、1993年3月)

第2は籌子との友情を惜しみなく語った松井からの聞き書記録である。山崎「村山籌子の評伝の試みをめぐって——聞き書きのこと——」(『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第18号、2013年3月)

なお『婦人之友』誌上に松井志づ子追悼の文章を執筆したのは籌子共ども同級生で婦人之友社の社長となった千葉貞子であった。千葉「松井志づ子さんとの別れの日」(『婦人之友』75巻11号、1981年11月)。

渡善子は1996年4月24日ご逝去。83歳。自由学園卒。19歳で婦人之友社に入社。1968年から1978年まで編集長。婦人之友社元主筆。渡は松井直系の後輩に当る。(山崎 怜)

母の遺言

村山亜土

母の童話は、長いのも短いのも、台所で野菜を刻んだり、お皿を洗ったりしながら考え、ふと手を止めて書かれた。その創作方法は「いきあたりばったり」であった。昭和六年に制作されたアニメ「三匹の小熊さん」を見ればよく分かるのだが、主人公を決めると、全体の構成なんかあまり考えず、いきなり、「これは熊さんのお家。三匹の小熊さんが仲良く暮らしていました。」とはじめる。それから、ジャガイ

モノの皮でもむきながら考える。彼女は子供になってその家の中に入り込み、さて、どんな事件を起こしてやろうかと、ワクワクしながらあたりを見まわす。次々と事件を思いつき、犬の探偵が現れ、ついに外へ飛び出す。汽車に乗り、スキーで滑り、飛行船から飛び降り、どんな困難だって、なんのその、奇知縦横の世にも不思議な奇跡によって、「えいやっ！」とばかりに解決し、「まあ、ほんとうによかったですね。」と終わるのだ。あんまり夢中になって、原稿用紙がビショビショになり、よくフーフーと息を吹きかけて、乾かしていた。それにしても、大人は「これじゃあんまり都合がよすぎるじゃないか」と思うだろうが、子供には全く痛快千万なのだから、しょうがない。母は、できあがった童話を読んで聞かせながら、私が寝転がって、思わず手足をバタバタさせたり、「キッキッ！」と叫んだりすると、チラチラ眺めて、まことに満足そうであった。

あつという間に童話が出来上がると、母は二階の父の部屋に行き、原稿を読ませ、登場人物たちの性格、服装、全体の構図などを細かく説明する。それを聞きながら、父は鉛筆でサッサッと下絵を描く。母が階下に降りて一時間もしないうちに「ちょっとー！」と父の呼ぶ声がして、母が急いで上って行く、「こんなもんかねえ？」と、父は体をちょっとそっくり返って、机の上の絵を顎で示す。母はまだ濡れている絵をつまみあげ、目を細くして、しばしば眺め、満足そうに「まあこんなもんね」と言ってから、「おスウちゃん（妹・真屋寿衛）のときは、今度、金沢に転勤になったらしいわ」とか、「おクニちゃん（菅井くに）は尾道から別府に移ったのよ」とか、わざと別の話をはじめるのであった。

だが、父の仕事、小説、戯曲、演出などについては、母は率直に感想を述べた。それがまことに鋭く、しんらつであつたらしく、自信家の父はだんだんと不機嫌になった。後年、母は私によく言った。「親っさんの作品についてほめるのはいいけれど、絶対に批判しては駄目よ。」私はそれを忠実に実行したつもりである。

それにしても一体、母の作品の、あの西洋風で、ユーモラスなセンスはどこから生まれたのであろう。彼女の母は裕福な薬種問屋の一人娘であり、養子をとって、男女十人の子供を生んだのだが、早くから、「婦人之友」の愛読者であり、アメリカ人の宣教師の家に入ったり、乗馬をしたり、ずいぶん進んだ女性だったらしい。その影響で母は自由学園に進み、ここで猛烈な読書力を発揮して、新知識を蓄え、とりわけ英語に力を入れ、よくディッケンスの原書を読んだ。その全集十巻は、辛くも戦火をまぬがれ、今も我が家の本棚にある。卒業後、羽仁もと子さんに才能をみとめられて「婦人之友」の記者となり、作家たちのインタビュー記事を書いたり、詩を発表したりした。その詩を私は一つしか読んだことはないが、長く情熱的な詩で「へえ、お袋はもともと、そうとうな詩人だったんだー」と瞠目した。

今、ふと思い出す。戦時中、母が私淑していた高村光太郎作詞の国民歌謡「歩け、歩け」をラジオで聞いていて、途中でスイッチを切り、凝然と動かなかった母の姿を。

母は実に筆まめであった。きょうだいたちには、葉書に細かい字でぎっしり書いた。獄中の小林多喜二や中野重治たちへは封緘葉書で書いた。父へのそれは、空襲で焼け残った半分だけが、「亡き妻の手紙」として終戦直後に出版された。それらは検閲の目を予想したもので、警視庁のことを「近ごろ、スコットランドヤードでは……」などと書いている。

母はおしゃれだったのであろうか。指輪もペンダントも、アクセサリーの類は一つも持っていなかった。洋服ダンスには、茶系の秋冬のオーバー、バーバリーのレインコート一着ずつ、そして、二、三着のスーツとスカート、引き出しには自分で編んだセーターやカーディガン。だが、それらの生地や糸は英

国製の最高級品であった。

二十代の後半から、母は、顔の小じわを異常に気にし出した。小豆島でオリーブ油が出来るようになるのと、早速、每晚大サジ一杯ずつ飲み、丹念に顔に塗ったりした。また、パックというのをはじめ「絶対に話しかけたら、駄目よ」と言って、顔を真っ白に塗り、私を驚かせた。一時間ほどで、それを剥ぎ取り、「どうツルツルになったでしょう？」と鏡ごしに同意を求めた。また、時にはレモンやキュウリの薄切りを顔に並べて、じっと寝ていた。これは「PHYSICAL CULTURE」という、アメリカの通俗医学雑誌から仕込んだもので、主治医にも盛んに新ニュースを吹聴した。

昭和一六年の末、戦争の危険が迫っていた。母はあわてて、愛用していたアメリカ製のクリームを買いだめして、ブリキの缶に詰め込み、満足そうに蓋をトントンと叩きながら「これで戦争が終わるまで大丈夫よ」と言った。戦争が終わったとき、クリームはまだ五、六瓶残っていた。

母は病気になってから、ラジウム温灸というのに凝った。毎日、おへその上にそれを置いて、モウモウたるもぐさの煙の中で、じっと寝ていた。その効果はかなりなもので、ずいぶん肥った。それからというもの、痩せた人が来ると「ほんとうによく効くのよ。あなたもぜひやってみるといいわ」とすすめるのであった。

誰に聞いたのであろうか。母は笹の葉をつめたマットを作らせ、その上に寝るようになった。部屋の中が強烈な笹の匂いで充満した。一ヵ月後、母は咯血した。「あれはね、絶対、笹のトゲが肺にささったのよ」と言って早速マットをくず屋に売り払った。

母は父のことを「ケチだ」と言った。なにしろ、一度使った鼻紙を机の上に並べて、乾かし、もう一度使うのであった。父の母は敬虔なクリスチャンで、若くして医者の方を失い「婦人之友」の記者となり、女手一つで二人の男の子を育てた。だから、中学、高校の頃、極度の貧乏生活を送ったのだ。そういう訳で、母が電気冷蔵庫や掃除機や洗濯機などを買い込むと、心の動揺を抑えるために、部屋の中を熊のようにあっちへ行ったり、こっちへ行ったりしていた。

四、五歳の頃、珍しく母は私を連れて外出した。私はうれしさのあまり「イッヒッピー」とか叫んで、スカートの腰のあたりを掴むと、母はその手を払って、「離れて歩きなさい」と言った。三歩ばかりあとからついていくと、道の反対側を指さして「あっちを歩きなさい」と言った。そして、この位置関係は小学四、五年の頃までつづいたし、私自身これを好ましく感じていた。当時、洋装断髪的女性はまだ少なく何となく恥ずかしかったのだ。

その日も二人はお互いに他人みたいな顔で歩いていたのだが、母は家の前で立ち止まり、こわい目で、「親を恥ずかしがるもんじゃないわよ。」と睨んで中に入ってしまった。私はギョツとなり、「やっぱり見抜かれていたのか」と、ドアのノブを握ったまま立ちすくんだ。

私が小学一年になる直前の昭和七年三月、母は急遽私を連れて、京都へ向かった。市電に乗り、真っ赤な神社の横を通り、京都帝大病院に着いた。古ぼけた木造の建物であった。消毒薬臭い廊下をギシギシ歩いて行った。なぜか、母は私の手をしっかり握っていた。ガラス戸をあけて、いきなり明るい部屋の中に入った。ベッドの上から、目の大きな女の人が私の名前を呼んで、両手をさしのべた。私はおそおそと近づいた。初めて会う祖母であった。祖母は私を抱き寄せながら、母の方をチラッと見た。母は戸口のところに立ったまま、顔をおおって泣いていた。私はあの時の祖母の目を忘れられない。今にして思えば、あ

れは、数年ぶりに会った娘を見る目ではなかった。一瞬にして何かを見抜くような目であった。あの母娘の間に、過去、何があったのだろうか。あまりにも性格が似すぎていたための反発であろうか。あの晩、母は病室に泊まった。二人は何かを話したのであろうか。翌々日、祖母の乳癌の手術が行われたが、すでに手遅れであった。一ヶ月後、祖母は小豆島で亡くなった。

母は口やかましくはなかったが、時々、一生忘れられないような言葉を私に浴びせた。「あんたが生まれた時、あんまり口が大きいので、びっくりして、気を失いかけたわ」とか、中学二年の頃、「あんたは顔はまあまあだけど、背が低いからお嫁さんの来てがなと思うわ。覚悟しとくのね」とか。

同じころ、珍しく私は台所のテーブルの下にもぐり込み、頭をしたたか打った。半泣きになって「いいことしてるのに、どうしてこんな痛い目にあうんだ!」と叫ぶと、母はフフッと笑って言った。「世の中ってまあそんなもんよ。覚えておくのね。」父は三度目の入獄中であった。

母は、私の画や作文を小学生の頃から一度も褒めたことがなかった。彼女はそれらをチラッと見ただけで、いつも、「あんたのは独創性がないのよ。どれもこれも人まねなんだわ」。「独創性って何だ?」中学生になって、私はやっと理解し、納得した。思い当たることが大いにあったからだ。そして、この言葉は、私の一生を支配することになった。

母は、妹達の生活を見たりして「医者だね、日銭が入るから、とてもいいのよ」などと言って、私が医者になるように極力すすめた。で、私もその気になった。だが、終戦と同時に、なんのあてもなく私は医科から文科に転じた。母は「やっぱりねえ」と言って、限りなく深い溜め息をついた。私が父と同じ道を歩むことを恐れたからかもしれない。

それからしばらくして、突然母は言った。「あんたは才能がないんだから、銀行員にでもなって、他人のお札の勘定をしているのが、一番いいのよ。」私が「えっ?」と振り返ると、母は天井を向いたまま、目をつぶっていた。

終戦直後、マッカーサーがパイプをくわえて、厚木に降りた新聞写真を見ながら、母は、「アメリカ軍は解放軍じゃないのよ」と父に言った。「これからは日本人をイエローと軽蔑している異民族に支配されるのよ。」

「なーに」と父は楽観的であった。「これからはわたらの時代なんだ。やりたいことは何でも出来るんだ。」母の死後、「二・一スト中止命令」が出て、情勢は急激に変化していった。

翌年、東京の大出版社から、若い婦人記者が鎌倉の我が家まで、原稿の依頼にやってきた。母は寝たまま襖越しにきびしい口調で言った。「あんたのところは、戦争中、あんなに戦争に協力したじゃありませんか。私は決して書きませんから、お帰りください。」数日後、記者はふたたびやってきた。電話のない時代であった。父が気の毒がって「何とか書かしますから」と帰ってもらった。だが、その時、母にはもうその体力が残っていなかったのだ。

母の葬式の数日後、父が何か私をなじるみたいに「やい、お袋はあの長い遺言の時、アドベエのことはただの一言も言わなかったぞ。これは一体どういうことなんだ?」「へえー」と私はとぼけた。そして、心の中で「遺言なら、もういやって言うほど聞いたよ」と呟いた。

母は決して意地の悪い人ではなかった。ただ、あまりにも率直に思ったことを言うので、傷ついたり、誤解したりした人がいたかも知れない。私はずーっと「僕はお袋に嫌われているようだ」と感じていた。だが、近ごろでは、「いや、そうでもなかったんじゃないか」と思うようになった。不思議な母であった。

(あとがきに代えて)

これは、一子、亜土の書いた籌子の評伝であり、ここに、はじめて全文が公表される。かれの著作『母と歩く時』(JULA出版局)はこれをパラフレーズしたものといえるが、山崎は別物として読んでいる。